
記憶がないっ！

相馬正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶がないっ！

【Nコード】

N2921W

【作者名】

相馬正

【あらすじ】

目が覚めると、記憶が失われていた。唯一覚えていたキーワードは“秘密”。携帯に残された履歴を頼りに、親しいと思われる5人に近付いてゆくのだが…。 火曜・金曜7時更新の全5話（26部予定）です。

第一話 記憶がないっ！

「このことは絶対に秘密よ。約束だからね」

「わかった」

……

……

…

ドサッ

「いって」

顔と腰に軽い痛みが走った。

んああ？ ベットから落ちたのか。

薄らぼんやりとした中、這うようにベットに戻る。

さっきのは夢…か。なんか意味深だったよな“秘密”とか言っても…秘密ってなんだっけ？ 確か場所は河原で、二人が立ってて

…、相手は…誰だった？

あれ？ いや、待てよ？

そんなことより…、ええと…、なんて言えばいいんだ？

そうだ“自分”！ 自分はいつたい…誰なんだ？

記憶が…ないっ！…！

「くあっ！」

ショックの反動で上体が起き上がった。

「っ」と

勢い余ってまたベッドから落ちそうになる。

「最悪だ。“自分は誰だ？”なんて…そんなのありか？」

完全に目が覚めて二度寝どころじゃない。ベッドから足だけおろし、目の前を見るとすぐに次の衝撃が…。

「ちよっ…、ここどこだ？」

駄目だ、ちよっとしたパニックだ。とにかくひとつずつ整理しないと。

まず、ここはどこか？

ここは六畳ほどの部屋で、机、ラック、洋服棚、そして今自分が座っているベットがある。

このベッドに一人で寝ていたとすると、十中八九ここは自分の部屋…だよな？

いや、知人の家に泊まりにきている…、なんて可能性もありか。待て待て、そんな可能性まで言い出したらきりが無い。この部屋を出れば嫌でも判るんだ、ここがどこかなんて大した問題じゃない。

じゃあ、自分は誰なのか？

そうだ、これこそ問題だ。自分の名前が判らない、どんなやつかも思い出せない。

さっきから“自分”、“自分”って違うよな？ 普通は自分のことを“僕”とか“俺”とか言うハズだ、それすらも判らない…。

ゾクッ

急に身震いした。気付くと体中からいけない汗が噴き出していた。

「これって、寝汗…なわけないよな」

まさに、えも言われぬとはこのことだ。頭では理解できなくても体は直感的に危険信号を発してるんだ。

駄目だ、取り乱しちゃいけない。とにかく一度冷静になろう。

「ふうー」

静かに深呼吸した。

落ち着け、一時的に混乱しているだけかもしれない。人の名前を忘れたり、「ナ」行が一つ出てこなかったり、よくあることだ。今はとにかく情報を集めよう。

何かキツカケになれば、ポーンと全て思い出して元通り…。

そうだ、きつとそうに違いない！

大丈夫だ問題ない。そう自分に強く言い聞かせた。

自分に関する情報を探そう

改めて部屋を見回した。

飾り気のない殺風景な部屋だ。テレビやオーディオ、パソコンといった家電の類がひとつもない。それだけじゃない、本やマンガ、ゲームといった趣向が判りそうなものすら何もない。いや、無趣味と

だとすると、自分は結構いい歳なんじゃないか？ そう思った矢先、壁に掛かっている服を見て目を疑った。

「これは、学校の制服？ ってことは学生!？」

部屋のドアの横に全身が映せる大きな鏡がある。近付いて恐る恐る鏡を覗き込んだ。

そこには確かに学生…、おそらく高校生くらいの男の子が立っていた。

「これが…自分の姿」

まじまじと下から全身をなめる。自分で言うのもなんだが、スラッ

としていてカッコいい。顔つきがちょっと軟派な感じもするけど、切れ長な目をしたいわゆるイケメンがそこにいた。

鏡の中にいる見ず知らずのイケメンは、手を動かしたり首を動かすと、自分の思い通りに動く、まるで操り人形でも動かしているような不思議な感覚だ。

そういえば昔、人の中身が入れ替わるストーリーの映画があったな。あれも確か学園ものだった。やっぱりこういうことって多感な年頃に起こったりするものなのかな。

学園…？ そうだ、生徒手帳！

さっきの制服に手を伸ばし、ポケットの中を全て探した。しかし、何も入っていない。机の中も探したが、ここにも入っていない。おかしい…、生徒手帳どころか何も無い。学生っていうには持ち物がなさ過ぎやしないか？

手掛かりのないまま時間だけが過ぎる。未だ自分の名前すら判らない。

そうこうしているうちに、カーテンの隙間から明かりが射し込み始めた。時計に目をやると針は7時前を指していた。

学生だったらもうすぐ登校しないといけない時間だ。だけど、今日が何曜日かも判らない。平日？それとも休日？どちらにせよ、この部屋に手掛かりがない以上、外に出るしかない。

ここにずっと引き籠つても、いつか誰かが入ってくる。とてもじゃないがそれこそ恐ろしい。

外へ出よう

ドアノブに手をかけると、その手は汗ばんでいた。

ただドアノブを回すだけなのに、今までこんなに勇気が要ったこと

があつただろうか。

「今まで”って？　そもそも今より前の記憶なんてないし」

ふと発した一言、“今まで”って、冗談か？

この状況で自分が冗談を言うとは…、それがとてもおかしく思えた。

ほんの小一時間とはいえ、その僅かな行動の積み重ねが気持ちにゆとりをもたらしたのなら…、いろいろ経験することは記憶を呼び覚ますキツカケになるんじゃないか？

自然と制服に手が伸びる。

「学校…行ってみよう」

シャツにズボン、ブレザーを順に着て、改めて鏡の前に立った。

「って！　茶髪かよっ!？」

さっきは薄暗くて判らなかったが、真っ先に茶色い髪が目に入った。それにこのだらしなく着くずした制服姿はなんだ？　もしかして、自分は少々“やんちゃ”なんじゃないだろうか？

「よし！　一人称は“俺”でいってみるか」

少しずつだけど、着実に前進している。すべては外へ向かう一歩を後押ししているようだ。

再びドアノブに手をかけると、さっきまでの汗は嘘のように引いていた。

ガチャリ

いざ、自分探しへ

第一話 2

部屋を出ると、左手に襖の部屋、向かいにもうひと部屋、右手にはトイレと下に続く階段が見えた。どうやらここは一般的な一戸建てのようだ。

できるだけ戸は開けたくないから、ここは素直に一階へ行こう。

下に降りようとする、階段の下にいた女の子と目があつた。彼女は目をまん丸に見開いている。

「お、…おはよ」

と、言ったかと思つたら、こつちが返事をする間もなくその場を去つてしまった。

一瞬の出来事でよく見えなかったが、彼女は黒髪のショートカットで、多分俺とは違う学校の制服を着ていた。見た目も俺より幼かつたような気がする。

あの反応からすると家族…だよな？ てことは、そつか、俺には妹がいたのか。

恐る恐る階段を下りると、さっきの子の声が出た。声はすりガラス調のドアの向こうから聞こえてくるようだ。

「お母さん、お母さん大変！ お兄ちゃんが起きてきたよ！ しかも制服着てる！」

「まあ！」

“まあ！” ってなんだよ。

もしかして俺は引き籠りだったのか？ この頭とこのなりでオタク

だったとしたら…、ナルなキモい奴じゃないか！
や、やっぱり“僕”って言うべきか、いやいや、そもそもオタクだ
ったら“拙者”がいいのか？
ええい普通が一番！

ドアを開けると、さっきの妹と母親らしき人が一緒に朝食をとって
いた。

と、とりあえず朝の挨拶だ。

「おはよ…」

「お、おはようキリオ。あ、朝ご飯食べるわよね？」

「た、食べよっかな」

「ちょっと待ってね、すぐ用意するから」

思いのほか若い母親らしき人がとても動揺している。

まあそこはいいとして…、ついに名前ゲットだ！

俺は“キリオ”！ 名字は？ 何キリオだ？ 焦るな、それは後で
表札を見ればいいじゃないか。

名前があつた

当たり前のことなのに、俺はちょっと感動していた。

テーブルは4人掛けで、妹と母は向い合せに座っている。えっと、
俺はどの席に座ればいいんだ？ この場合、普通は妹の隣に座るよ

な。ふとその席を見ると妹と目が合った。
妹は慌てて目を逸らすと、パンをかき込み、ミルクティーで一気に流し込んだ。

「ごちそうさま！　じゃ私行ってきます！　お母さん携帯よろしくね」

行動がすべて駆け足だ。

「ああつズルい！」

そそくさと席を立った妹に母が漏らした一言…。
なんだなんだ？　君たち…、俺と一緒に嫌なのか？

妹が出て行き、二人きりになるとリビングは静まり返った。
母はパンとサラダと紅茶を俺に差し出し「はい」と言っただけ、一言も話さず台所仕事に専念している。その鍋はさっきも洗ってなかったか？

それにしても、テレビ…大きいな。テレビ台に入っているのは最新式レコーダーだしオーディオも立派なものだ。なぜか違和感を感じるのは気のせいかな？　俺の部屋には何もなかったはずだが…、このもの凄い格差はなんだ。

もしかして俺、なんか悪いことしたのか？　まさか、“おいた”すると部屋にある物を捨てられてしまうとか？　そんなの聞いたことねえよ！

やめやめ、どうせ考えても答えなんか出ない。

とりあえず飯を食っちゃおう。

朝食を全部たいらげ、席を立ったその時

「キリオ、その携帯…アナタのよね？」

母がやつと口を開いた。

ずっとテーブルの上に不自然に置かれていた紺色の携帯、この母の携帯にしては少し色気がないと思ってたけど、やっぱり俺のだったか。

「ああ、本当だ。俺のだ」

まるで三文芝居のような台詞を吐く。

妹の去り際の言葉からも、俺の携帯じゃないかと思当をつけていたが、母から切り出すのを待っていた。しかし、半ば諦めかけて席を立ったこのタイミング…、最後の最後に迫られてやつと言いました的な感じ…。

どうやら家族と俺のコミュニケーションは上手くいっていないようだ。

「いつてきます…」

「い、いつてらっしゃい」

すっげー神経使うな。いつたいどんな奴だったんだ俺って？ この調子じゃ他のことなんか全然聞き出せない。

家の外に出て後ろを振り返る。

「良かった。うちの屋根だけ色が青い」

バカげているが、こうした目印でもないと家に帰れないって事態が

起こりかねない。今の俺にとってはちょっとしたことが致命的なんだ。

「そうだ、表札も」

門の石造りに木彫りの表札がはめ込まれてある。そこには一文字“柳”とあった。

俺の名前は“柳キリオ”

「まあ悪くない響きだ」

名前が判ったところで何も思い出さなかったか…。でも、失ったものを少しづつ取り戻していけば、いつかは…。

そのまま空を仰ぐと、地球をぐるっと一周しているといわれている隕石群のリング“シフォンの帯”がハッキリと見えた。本日は快晴なり…。

そういえば、昔見た映画だったり、最新式レコーダーのことだったり、このシフォンの帯も…、自分を取り巻く環境以外の一般常識や無駄知識は覚えてるみたいだな。

つまり思い出と単なる情報とでは、脳が司る記憶の質や保管場所が違っていることか。

こうやって自分が措かれた今の境遇を客観的に見直すと、新手の脱出ゲームみたいで滑稽だな。

「あ…、滑稽なのは自分自身が、リアル過ぎて笑えねえ…」

これがゲームだったらどれだけ良かったか…。そうだ、さっき手に入れた携帯！

学校に着くまでに自分の交友関係くらいは把握しておかないと。電源ボタンに手をかける。

ロックはかかっていない。なんて無用心な…。って、そのお陰で見れるワケだけど、なんか複雑だな。

「うわー、なんか人の携帯見るみたいで気が引ける」

まずは履歴確認と、発信は少ないな、逆に着信は結構あるぞ。

「タケル”に”ユウ”、”カオル”に”シン”に”ヒロ”、と」

この5人がほとんどだ。主だった友達ってことか。

しかし…男か女か判んねー名前ばっかだな。それに非通知がたまにあるのも気になる。昨日の最後の着信も非通知だ。

とにかく、まずはこの5人を探さないとな。全てはそこからだ。

第一話 3

俺が記憶喪失のことを誰にも打ち明けず、慎重になっているのには理由がある。

てか、何事もなきやとつくに家族に打ち明けてるっての！ だけど唯一覚えていたことが邪魔をしていた。

よくわからない“秘密”だ

なぜか俺は、そのことを言わない約束をしまっている。もしかするとそれは夢の中の約束かもしれないけれど。

だけど、もし現実だったとしたら…、昨日までの俺にとっては最後の記憶で、今の俺にとっては一番新しい記憶ってことになる。過去の俺と今の俺を繋ぐ唯一の鍵…、きつと記憶を取り戻す重要な手掛かりなんだと思う。

そのせいもあって、安易に誰かに知られてはいけない気がした。だから、今俺がすべきことは気の許せる相手を探し出し、全ての事情を打ち明け、記憶を取り戻すための協力を得ることなんだ！

とは言ったものの、たった今直面している問題をどうにかしないと…。

学校って…どこだ？

「おっす！ キリオ！」

少し間が空いた。

ああ、“キリオ”って俺のことか。

うわっ、男でロンゲ！ しかも、俺と同じ制服、コイツは誰だ？
例の5人のうちの一人か？

なんか見た目もチャラいし、“おっす”って挨拶の返しだったら…
こうか？

「お、おっ」

う…、じっとこっちを見てる。何か返事が変わったか？ こいつ体格ガツチリしてるし、ハイタッチとかした方が良かったのか？ それともやっぱり俺はオタクキャラなのか？

「どこ行くだよ？ 学校と逆方向に歩いて」

「へっ？」

「しかもお前が朝から学校なんて、今日って何かあんのか？」

「ちょ、ちよっとな」

「ふーん」

見知らぬ相手とゼロ状態から会話して、意味不明な質問さえもかわした！ 何気に凄くないか俺！？

少し肩が震えてる。ピンチを切り抜けた後にくる快感にも似た感覚…、これが武者震いってやつか！

実際、ツツコミが入ったのは“学校と逆方向に向かっていた”という行動だけ、キャラ自体はスルーだったんじゃないか？ この調子ならいける！

今日は“おっ”と“ちよっとな”で乗り切ってやるぜ！

「そついえばキリオ、昨日の夜電話したのに出なかつたな」

「…！ 悪い、ちよつとな」

昨日の夜、俺に電話した奴は二人。タケルと非通知の奴だ。

少し話したただけだが、この距離感の間柄で非通知ってことはないだろう。つてことは…、コイツはまずタケルに間違いない！

携帯の着信が一番多いのがタケルだから…、予想される俺との関係は…親友！！

待てよ？ 親友がこのチャラ男つてことは、俺がオタクつて説はなくなつたんじゃないか？ 益々いいぞ！

「何ガツツポーズしてんだ？」

「なんでもねーよ…タケル」

俺はさりげなくタケルの名前を口にし、恐る恐る横目で表情を窺った。最終確認だ。コイツの表情に疑問の色は見えない。

通つた！ コイツはタケル確定だ！ いいぞ、親友ゲットだぜ！

さらにコイツと一緒になら学校にも行ける。学校までの地図もゲットだぜ！

「キリオ、今日はやけに機嫌いいな」

「ちよつとな」

「はーん、判つたぞ、お前らやっぱり付き合つことになつたんだろ？ だから俺の電話無視したり、朝ちゃんと起きてんじゃないか？」

「なっ！？」

待てっ！　なんだこの流れ？　今の俺じゃどう転んだって対応できない会話だろ？　付き合う云々って、交友関係もままならないうちに恋愛話って…、そもそも相手誰だよ！　相手…って？　ちよっとだけ気になるな…。

いや、おかしくないか！？

こっちが情報を引き出そうとしたのに、逆に質問されちゃってる…。しかも、俺の行動がおかしいことと巧く繋げてきやがった。タケルの奴…、さすがに俺の親友だけのことはある。

はっ！　待てよ。そもそもこれが俺の秘密なんじゃないか？　判んねーけど、ここは迂闊に答えちゃダメだ。

「…なあ、付き合ってるかどうかは別として、何で朝起きたくらいでその話になるんだ？」

「お、なーんかうまくごまかそうとしてんだろ？　まあいつか、その口ぶりじゃ付き合っていないみたいだな。ほら、ユウって見た目はアレで真面目だろ。だから『朝はちゃんと来なさいよ』とか『一緒に学校行こう』とか言われたんかなって。お前、さっきユウんちの方に歩いてただろ？」

なるほど、そういうことか。慎重になって正確だった。

“ユウ”といえば、あの5人の中の一人に間違いない。

整理すると、ユウは女で、見た目は今風のギャルなんだけど真面目っていうギャップがある。（多分）

さらに俺とは友達以上恋人未満の微妙な関係だ。（多分）

これで友人と恋人未満を把握したことになるな。よしよし、幸先いいぞ。

「おっはよっ！ 二人とも」

また一人、今度は明るめの女子が現れた。

「おっす！」

タケルが挨拶を返す。

この子も5人の中の一人？ もしかしてこの子がユウ…？ いかん
いかん意識するな。とにかく返事しておかないと。

「お、おう」

「なぐに、キリオ何か変だぞー？」

「だろー」

当たり前だ！ お前は誰なんだ？ ユウなのか、違うのか？
そうだ！ ユウなら見た感じはギャル…ん、んん？ 黒髪のシヨ
トでもロングでもない、これはセミロングになるのか？ 化粧っ気
もないし、ギャルと言われれば見えなくもないが…。

「キリオとヒロはいつつも遅刻組なのに、今朝はどうしちゃったの
？」

ヒロ？

「だろ、コイツ言わねーんだよ。俺はてっきりユウと付き合い出し
たのかと思ってよ」

「ああ、ユウ真面目だもんね。でもないない、キリオって相手に染まるタイプじゃないじゃん」

「そっぴやそっぴだな。カオルお前頭いいな」

カオル！？

「まーねー」

いかんいかん、聞き役に徹しちゃ駄目だ。

「勝手に言ってる」

と、口では平静を装っていたが、心の中は穏やかではない。『ナイスだタケル！』と思わず叫んでいた。

この得意気にしてる女が“カオル”か。なんかタケルといいコンビだな。

「じゃあ勝手に言うけどさー、二人ともお互いのことどう思ってるだろね？」

「カオル…それってフツー、本人がいないところで話さねえか？」

まったくだ。

「あそつか、今朝は珍しくキリオがいるんだった。じゃあユウの方はどうだろ？」

こいつ…わざとだろ。

「あー、俺はいい線いってると思うぜ。ユウって素直だから感情とか隠しきれないっていうか、やっぱりキリオがいると違う気がするもんな」

「お、タケルもなかなかするどいね。つーか、アンタ意外にユウのことよく見てるのね」

「バツカ、誤解を招くような言い方すんなよ！ キリオ、違えーからな」

「何言い訳してんのよ」

なんとというか、この二人…、息が合ってるっていうか、全然会話に割り込めねえ。さつきから人の恋路を好き勝手言いやがって。お前からこそどーなんだっての。

でも、いい感じだ、情報は揃ってきてる。

“ヒロ”も出てきた。俺と同じ遅刻常習犯って言うってたな。あれ？俺って遅刻ばっかしてんのか？ ま、まあいい、もう過ぎたことだ、今日からは違う。

これで例の5人のうち残るはまだ名前すら出ていない“シン”だけか。

まあ、ユウもヒロも名前だけで、まだ会ってはないけど、少しずつ交友関係が見えてきたぞ。

タケルとカオルはあの調子ですつとしゃべり続けている。

俺は記憶喪失を悟られまいと発言をセーブしていたが、そんなこと差し引いてもこの二人の会話は圧倒的だった。いかんせん口数が少

なかつたか…？ まあいい、内容は他愛もない話ばかりだ。

それからもう一つ判ったことは、俺は気難しくマイペースだったこと。登校中に会った他の奴らの反応がそういつていた。

朝から俺がいることにビックリして、でも次の瞬間には『まあキリオだからな』って、みんな同じ反応しやがった。なんか、遠目には変な奴くらいで、距離感が近いのは御免って感じた。

なるほど、今なら母と妹の態度も理解できる。家族からみても俺は絡みずらい奴だったことか。

第一話 4

生徒の数が増えてきた。ってことは、あの辺りに見えてるあれが学校か。

こっからはどこで誰に会うか判んねーからな、名前が出た奴のことはおさらいしておかないと。

“タケル”は、黒のロングでガツチリ系と一見いかにもチャラ男だけど、意外に社交的だ。登校中に会った他の奴等との絡みからも交友関係が広いのが判った。俺とは親友のようだが、少しミスマツチな気がする。まあ、とにかく話し易いし気のいい奴だから、誰とでも合うんだろうな。

“カオル”は、黒のセミロング以外これといった特徴がない。顔立ちはまだまあ普通って感じだ。タケルと同様に交友関係は広そうで、しかも男女分け隔てない。ユウとは親友らしいから、俺とタケルの関係もこの二人に絡んだものかもしれない。

“ヒロ”は、まだ会ってないけど、話を聞いた感じだとタイプの俺に近いみたいだ。ちょっと前まではタケルよりもヒロとつるんでいることが多かったらしい…。まあ、いつも昼過ぎに学校に来るらしいから、詳しいことは本人と会ってから話そう。

“ユウ”は、一見ギャル風だけど真面目らしい。俺と一緒に登校しているせいもあって、タケルとカオルの話はユウに絡んだものが多かった。何をもって真面目というかは人それぞれだけど、陸上部に所属していて朝から練習に出てるってだけで十分真面目だと思う。

正門を抜けると、カオルが突然グラウンドの端に向かって叫んだ。

「ユウー！ おっはよー！」

え！ ユウ！？

自然と目が追いかける。

じゃあ、あこで走り幅飛びしてる…茶髪のショートの子が“ユウ”？

彼女は着地と同時に手を振り返してきた。間違いない、あの子が“ユウ”だ。

しかも、何かに気付いたのか、すぐに手が止まった。タケルもカオルも俺を見て笑っている。

ああ、その何かってのは俺のことか。

ユウがこっちに向かって走ってくる。

それにしても…顔ちーせ…！ いや陸上部だけあって、体が細くて手足が長く見えるせいか。

徐々に近付いて顔が認識できる…って、おいおい、すげー可愛いじゃないか。

恋人未満…！？ いかん意識しちまう。

ユウはグラウンドのネットを隔てた俺の目の前までやって来た。

おわ、目エでつか。

「キリオ！？ おはよ。どうしちゃったの？」

「お、おう。ちょっとな」

どうしたもこうしたも記憶もない。

とにかくやばいくらいに可愛い。っーか意識し過ぎだろ俺！

「ふうん…。ねえ、昨日って何の用だったの？」

「え、昨日？ ああ、ちょっとな」

「…」

アレ、何かあからさまに機嫌が悪くなったぞ…？

「そうね、どーせ私には関係ないもんね！」

怒った顔も可愛いな、とか思ってる場合じゃない。

ユウはそう言って練習に戻ってしまった。
やっちまった…。

「バーカ」

タケルが一括。

「キリオ！ アンタ、ユウに何かしたんじゃないでしょうね…？」

カオルも俺を責め立てる。

「何もしてねえよ。多分…」

「多分って何よ！」

「だからキリオ、昨日は何してたんだよ？」

よくしゃべるこの二人に追及されるとたまらない。

「うっせー、知るか！」

こっちは記憶喪失だったの！　ここまで普通に会話できてたのが奇跡だったんだ。ほんのついさっきまで上手くいったのに、昨日のことなんて知るかよ。

…昨日！？　記憶が消えた日だ。

俺は何をしてた？　誰かと秘密を交わしてた。

待てよ…、今のところ俺の昨日の行動を知ってる奴はいない…。ってことは、その誰かは今日俺が話したメンバー以外になる。だとすると“ヒロ”か“シン”、もしくは“非通知の奴”…、この三人に絞られるんじゃないか？

ヒロは昼にならないと学校に来ない。となると、今はシンを探すべきか。

あながち失敗ばかりじゃない。

「なあ、シンってもう学校に来てるかな？」

タケルはカオルと顔を見合わせ、さあといった表情を返した。カオルはさっきのユウとの件が尾を引いてるせいか、素っ気なく「知らない」と突っぱねてきた。

「な、何か怒ってないか？」

「…」

「じゃなくって、俺達二人ともシンって奴は本当に知らないぜ。誰だそいつ？」

タケルは気まづくなりかけた雰囲気をやんわり収めてくれた。ちょっと助かる。

「ただ、せっかく見つけた糸口は、すぐに霞がかってしまった。」

「シン”を知ってる奴がいない。」

ということとは、“シン”とは俺だけが知り合いつてことになるよな。それを探すのって難易度高くないか？ いや、でも、電話はそれなりにあるし、名前も愛称で登録してるんだから気の知れた間柄のハズだ。もう少し様子をみれば、向こうから現れるかもしれない。電話がかかってくる可能性だってある。

「そうだ焦ることはない。今日一日でなんでもかんでも判るわけじゃないしな。」

「ただ、一度気になるとなかなか頭は切り替わらない。」

「もしかすると“シン”はクラスメートの誰か、とも思ったが、どうやらタケルと俺は同じCクラスみたいなのでそれもない。」

「なんだよ、俺の顔に何かついてるか？」

「いや、面白れえ顔だなあとと思って」

「んだと！」

「はは、冗談冗談」

「ちなみにカオルとユウはDクラスのようにだ。」

「ヒロはAクラスらしい。」

「スッキリしない…、後一人だったのに。」

俺は部活もやってないし、委員会にも入ってない。クラスが違うと
なると、それ以外にシンとの接点が見当たらない。

はっ！ もしや、妹か？

“シン子！”

いや、ないない。アホか俺は。おしんこちゃんって言われてイジメ
られちまう。

じゃあ、母さん？ いやいや親父？

… 違えな。そもそも家族を“シン”とは登録しないだろう。。。

「ううー判らん」

行き詰って机に突っ伏していると、見覚えのないオッサンが教室に
入ってきた。スーツ姿で歳は30代後半って感じ、オデコがきてる
若ハゲ気味のこいつは、おそらく担任だ。

その推定担任は特に前ふりもなく「出席を取るぞ」と言った。

「相田シヨウ」

「はい」

「石川セリカ」

「はい」

・
・
・

「堀田トモヤス」

「はい」

「柳キリオ」

「はい」

「…は欠席と。お！」

ここで流れが止まった。

「おお、すまん、柳。今日は出席か」

教室内がザワついた。

「マジ、キリオ来てんぞ」

「朝キリオだ」

さつきから席にいただろ！

今更気付く奴がいるとは。登校ん時もそうだったけど、朝から来たくらいでツチノコ発見みたいに騒ぐな。

「大和タケル」

「ぼはあーい」

タケル…、お前なんて言うてるかよく判んねえよ。

「和田ツトム」

「へーい」

それにしても、注意して出席を聞いてみたが、やはり“シン”にあたりそうな人物はいなかった。こりゃあ俺から電話しちゃった方が早いかな。

「なあタケル、俺が朝から来たのっていつぶり？」

「朝？ ああ、遅刻じゃない日か」

「うわ、皮肉かよ」

「ちょうど二ヶ月ぶりだな。そんな時も確か俺、キリオと登校したから間違いないぜ」

その時も？ なんだ、ただの偶然か？

キーンコーンカーンコーン

おっと予鈴だ。とりあえず授業は静かに受けるとするか。ここまでは順調だしな。この調子で情報を集めていけば、途中で記憶が戻るかもしれない。

一限目は数学だった。

机の中にあつた教科書を開き、教壇に立つ教師の説明をしばらく聞いてすぐ異変に気付いた。おかしい…、とてもじゃないが理解できない。

そうか！ 失われてしまった記憶の中に、きつと勉強の知識も全て

含まれてたんだ。昨日までの俺は天才だったに違いない。
黒板には意味不明な暗号が連なり続けている。それをノートに複写
するはずのペンは、既に俺の手元にはなく、鼻と口の間に挟まって
いた。

それにしても辛い…興味のない話ほど長く感じる時間はない。
そうだ、この長い時間を無駄にしないよう、やるべきことを整理し
ておこう。再びペンを持ち、ノートの上を走らせる。

次に何をすべきか

第一話 5

休み時間に入るとすぐに屋上に向かった。

授業中ずつと考えていたこと…、漠然とした勘だけど、今の自分のキャラを分析すると、“屋上”と“保健室”は外せない気がしていた。おそらく普段から俺はそこによく行き、残りの一人“シン”とは、そこで交流があったんじゃないかと思ったワケだ。学園ドラマやアニメでいえば屋上は定番のシーンだからな。だけど、今はどこの学校も閉鎖しているだろう。過度な期待はしてないが学校散策だと思って階段を上る。

『開放中』

予想に反して、屋上に出る扉には文字通り来る者を歓迎するプレートが掛けられていた。

なんて危機管理の薄い学校だ。

ギギイ…

重苦しい鉄の扉を開けると、そこには校舎の敷地分のスペースがそのまま広がって開放感に溢れていた。

“開放中”とは…、上手いこと言ったもんだ。

入り口から少し歩いて辺りを見回すと、男子生徒が一人、金網に寄り掛かっていた。

彼もこちらに気付き手を挙げている。

「よう、珍しいじゃん」

「おう。ちょっとな」

もう相手が誰であろうと、とりあえず自然と返事をしてしまう。既に条件反射だ。

さて、コイツは誰だ？

俺はこの謎の男子生徒に歩み寄った。おそらくこいつが“シン”だろうと思いつながら。

「何見てるんだ？」

「べつつに…、お、今日はサッカーやるらしいな」

グラウンドに集合した生徒達がサッカーボールの入ったキャリーを運んでいる。

整列し、教師が何か言ったかと思うと、整列の間隔が広がった。

ああ、準備体操か。

「お、あのガタイがいい奴はタケルか」

待て、なんでタケルがあそこに…って！

「俺も体育じゃんかよ！？」

「あ？　なんだよ今頃、どーせサボんだろ？」

くっそ、せっかく真面目に授業に出たのに…、一限目だけだけど。仕方ねー、今は授業よりこっちが優先だ。

ピー！

「お、始まるぜ」

始まるとすぐにボールがタケルに渡った。すぐさま相手チームの一人がタケルに近付いてきたが、すかさずパスを出して凌いだ。

「へえ、様になってるじゃん」

うちのクラス結構うめえな。ほんの数分だけどすぐに判った。タケルだ、あいつ超うめえ。

「やるじゃんキリオのクラス。特にあの司令塔の大和、アイツは別格だな」

「大和？」

「あ？ お前、いつつも一緒だろ？」

おおおう？ “大和”ってタケルのことか？ そっぴや出席順、俺の次だったな。

「そこ、セントリング！」

「いけ、セントリング！」

今の俺の声か？

「ばか、八毛んじゃねえよ」

ああ、こいつか。

タケルからセンタリングが上がる。
オフサイドにはなっていない、うまい！

「走れ、合わせる！」

「いけるぞ！」

クラスの名前わかんねー奴、頑張れ！
足が届いた！ キーパー抜けた！！
いける！

「プイッ！」

「うおっっしやあー！」

「まずは1点！」

思わずハイタッチする。

「タケルのやるー、こんな特技があったとは」

「なんだよ、知らなかったのかよ。でもいいのか？
相手はDクラ
スだろ。カオルもユウも相手チームの応援だぜ」

「げ、本当だ」

女子は両サイドから応援している。その中には確かにユウとカオル

の姿が。しかもゴールを決めたうちのクラスにブーイングしてる。うああ、タケルつれえな。

って、コイツさっき“カオルもユウも”って言ったか？

タケルとカオルはシンを知らない…、だとするとこいつは“シン”じゃない？

おっと、またタケルにボールが、左サイドがフリーだ。

「うっしや、左がガラ空きだぜ！」

「おらー、左サイドあがれー！」

また、コイツ、同じようなこと…。

あれ、なんかグラウンドの連中がこっち見てるぞ？

「はは、熱くなり過ぎたな」

「あー、そゆこと」

体育教師らしき先生がこっちを見ている。

「コラ貴様等！ とっくに授業始まつとるぞ！！」

「はは、やべーやべー」

二人ともすぐに屋上の入り口に向かった。

あれ？ そういえば、こいつもサボリだよな？ それになんか気が合うつつーか…。

確かタケルとカオルの話の中でそんな奴がいた気がするな。俺と付き合いがあつて、似た感じ…。

そつだ思い出した！ “ヒロ”だ！

今更ながらまじまじと見ると、髪は金髪、目は釣り目、細見でシャツはだらしない。
間違いいねーだろ！

「つたく、お前昼から来るんじゃないのよ！ ヒロ！」

「あ？ お前こそ朝から来てんじゃないよ！ キリオ！」

お互い顔を見合わせ笑ってしまった。

「ぷっはは、何の偶然だ。いつも遅刻する二人が揃って朝から来てるなんてな」

「ああ。だけど、授業サボってる時点で朝来た意味ねーけどな」

「違いーねー」

なんだ、この心地良さは。タケルとは違う話しやすさ？ いや、もつと感覚的なもの…。

とにかく、こいつはヒロで確定だ。これで四人目！

となると、残るはまだ会えてもない、情報もないシンだけだ。

そして俺の交友関係上、ピースにはまっっていないのもシンだけ、しかも手掛かりすらない。

裏を返せばつまり…、ここをクリアすれば大きく道が開けるってことじゃないか？

あくまでこれは俺の勘だが。

「じゃな、俺、教室戻るわ」

「ああ、じゃあなヒロ」

なぜか今の俺はとても心地いい。気運ていうんだっけ？ この流れのまま一気に5人目だ。

よし！ シンに電話をかけよう。

携帯の履歴を開きコールに手をかける。一瞬だけ指が止まった。

「全く面識のない奴に電話するのって緊張するな」

はは、何を今更。今日一日ずっと似たようなことの繰り返しだったじゃないか。基本的に受け身でいればいいんだ。

あれ？ 俺から電話するのに受け身でいいのか？ まあこの際もうどうでもいいや。

ブルル…ブルル…ガチャ

出た！

『はい』

男の声だ。

「あー…、オレオレ」

しまった、これじゃあ何かの詐欺みたいだ。

『おう、キリオか。どした？』

お、この感じ、結構仲が良さそうだな。

「ああ、ちょっとな。それよりシンは今どこにいるんだ？」

『どこって？ 普通に学校だけど』

あれ、シンも学校の生徒じゃないか、なのになんで誰も知らないんだ？

「なんだ、学校来てたのか。なら昼飯一緒しねえ？」

『あ、ああ！？ えーっと、いいケド。お前んとこのガツコ、河川敷のさらに向こうだよな。もしかして近くにきてんのか…？ ああそっか、サボリかー？』

おおっと、違う学校かよ…。どうりで誰も知らないワケだ。

「いや、悪い。やっぱまた今度な」

『あ、おいキリオ！ 何だよ変な奴だな』

「ホント悪い。じゃあな」

話半分になってしまったが、電話を切った。これ以上話し続けたら不審がられるのがオチだ。

それにしてもシンは俺とどういう関係なんだ？ 同中か？ いや、それがわかったところで何かが大きく進展するとも思えない。他の誰とも絡みがないんだからな。

たーく、なにが“大きく道が開ける”だ…、たいした勘だぜ。

でもこれで俺の周りの主要な人物は把握できたことになる。今日はこれで充分だ。後は家に帰ってキチンと復習しとけばバッチリだろう。

…って、俺、ちゃんと家に帰れるかな…。

#つづく

第二話 恋がしたいっ！

記憶をなくしたあの日から数日経った。

今日も一日なんとか乗り切った。タケルは珍しく用があるとかで、久しぶりに一人で帰っている。

ユウとは…あれ以来、あまり話していない。言い訳するのも変だと思っただし、ユウはいつも部活することもあって、キツカケが作れないままだった。

相変わらず綱渡りみたいな毎日を送ってるけど、変わったこともある。

日を重ねることに余裕が出てきた。記憶は戻ってないが、つまりは新しい俺が、新しい“自分”を築き直しているってことだ。

それに思いの外、今の俺はうまくやっている。

例の5人を中心に、家族とも、他の奴らとも積極的に会話するようになった。単純なことだけど、話しをすれば少なからず得るものがあった、何もしなければ進展はない。それが判ったんだ。

まあ、シンだけは別の学校ってこともあって、未だに会ってないけど。

こうして一人でいる時は、自然と自分の行動や周りの反応を整理する時間になっていた。だけど…、何か引つかかる。何か忘れてないか？

河原沿いの道を歩いていたら、高架下にふと目が向いた。視線の先には猫とじゃれている少女が見えた。

長い黒髪と整った容姿、ちょっと目を向けただけなのに、俺はその場に立ち尽くし、その少女を見つめていた。なぜか目が離せなかった。

彼女から伝わってくる感じ…、清楚とか？ いや、もっとほかの何か…。河原を背にした彼女からは哀愁のようなものが窺える…。なぜだろう…。猫とじゃれているだけの他愛もない光景なのに…。この切ない気持ち…。憂い…。彼女が気になってしょうがない…。

「あの子はいつたい…」

ついさつき見かけた名前すら知らない子だぞ？

以前の俺はユウが好きだったハズだ…。それなのに、ユウ以外の子が気になるなんて…。

新しい自分…、ってことは、これまでの人間関係を変えてしまう可能性もあるってことなのか。

「どうすりゃいいんだ…」

立ち尽くす俺を我に返したのは、携帯のバイブだった。ディスプレイを見ると“非通知”の文字。

さつき思い出せなかったのは、これだ！！

未だ一切の関係が判っていない“非通知の人物”、この電話はそいつからだろうか？ だとすると記憶をなくした時の自分と最後に話をしたかもしれない相手…。

どうする？ 出るべきか？ 早く決断しないと切れてしまう。

俺の信条は…、何もしなければ何も進展しない！
通話ボタンを押した。

「もしもし…」

『…』

返事がない。

「もしもし？」

『ねえ、アナタ今どこにいるの？』

女の声？ 違う…？ いや、何か変声機を使ってる？
音声変えて電話って、どう考えても怪しいだろ。どうする？ 正直
に答える必要はない。

「ああ、今学校だけ…」

『何嘘ついてんの？』

「えっ？」

なんだ？ まさか、俺をどこから見てるのか？ 辺りに身を隠せ
そうなどころは…、たくさんあるな。

『探せつこないって』

…！ やっぱり！ 確実に見られてる。いったい誰が？ そもそも
何が目的なんだ？

「俺に何の用だ？」

『用も何も、アタシが誰だか判ってないでしょー？』

やっぱり女？ 女の声はどこかふざけた感じだ。俺のことからかってやがるのか。

こいつが、あの日の非通知の相手…。

「えっと、どちらさまでしたっけ？」

『ひどーい、本当に忘れちゃったの？』

“本物に”だと！？

こいつは…、俺の記憶がないことを知っているのか！？

「待つ…」

ガチャ

『プープープー…』

ちよっと待て！ ここで電話を切るか？ おいおい、話も途中だったじゃないか。なんだこの尻切れトンボは。

どこの誰だか判らないけど、俺の記憶喪失に気付いている奴がいた…。

俺は、今のところ誰にも気付かれずに上手くやっていた…ハズだ。どこかで不自然な行動をとって見抜かれていたとか？ いや、あの

口ぶりは明らかに始めから知ってる感じだった。

まさか…、“秘密”を交わした相手は奴か？

俺がそれを覚えているかの確認？

覚えていないと判断して電話を切られた？

くそ、駄目だ！ 何を考えても“？”がついちまう。

家に着くまで、非通知の女（だと思う）のことが頭から離れなかった。

ここしばらく、日常に溶け込み出したこともあり、そっちに気を取られ過ぎていた。しばらく忘れていた“秘密”のこと。

そうなんだ、その手掛かりをつかむ為に、自分と交流のある人物をあたっていったんだ。それがあの5人。そして5人とは別に存在する最後の一人、“非通知の人物”がついに現れた。

…、どこの誰かも判らないんじゃないか、俺からは動きようがないか…。

「いや…、あるぞ！」

唯一の手掛かりは、奴が俺を見張ってるってことだ。それを逆に利用すれば…！

次こそは必ず“非通知の女”の尻尾を掴んでやるぜ。

第二話 2

翌朝、家を出るとユウが待っていた。

「おはよ、キリオ」

「お、おう、どした？」

「今日朝練ないの。だから一緒に学校行かない？」

「ああ、行こーぜ」

ん？ 朝練がないと一緒に学校に行くものなのか？

それにしても、横を歩くユウを改めて見ると…やっぱり可愛い。茶色がかったサラサラのショートが歩く度に小刻みに揺れる。ついか本当に目エでつけ。特に化粧っ気がないのにこれだ。

だけど、ドキドキ感はない。

やっぱりそれは、河原にいたあの子が気に掛かっているせいかな。

そっぴいえは今の俺はユウとちゃんと話したことがなかったな。趣味とか好きな食べ物とか、何も知らない…。

「この間はゴメンね」

「え、何が？」

「なんか私、態度悪かったから…」

ああ、あの始めて会った時か。ずっと気にしてたんだ。別にユウが気にすることないのに。

「ああ、気にしてないよ」

「そっか…」

待てよ。この間もそうだったけど、素っ気ないのは駄目だ。ユウは見た目は垢抜けてるけど、中身は相当真面目だ。逆に気にかけて過ぎなくらいじゃないと駄目なんだ。

「ウソ…、けっこーきた。俺って打たれ弱かったのな」

「そっか。あはは、ゴメーンね」

あどけない笑顔が返ってきた。やっぱり、この子は笑ってる方が似合ってる。

「ユウが陸上やってるのって、やっぱり走るのが好きだから？」

「え？ まあ、それもあるけど、自分と向き合えるからかな」

「自分と？」

「そ。悩んだりした時なんかは、ひたすら走ったりする」

「うわっ、ソレ、どMじゃん」

「ち、違つわよ！　なんていうか、自分の中で答えを出すっていうか…」

「ふーん、そういうもんなんだ？」

「そういうものなのっ！」

はは、けっこう頑固だ。

「昨日は…、ちょっと思うところがあつて、ずっと走ってたんだ」

「悩みつてやつ…？　それで、答えは出たの？」

ユウの足が止まった。

「内緒」

「なんのフリだよっ」

「いーの。あ、こっちから行かない？」

ユウが立ち止まって指差したのは学校の裏門の方だ。

「いいけど、遠回りだぜ」

「いーのいーの、せっかく一緒なんだから、もう少し話したいなって」

くあーっ、こいつ可愛いなあチクシヨー。

この道も一応通学路だ。少ないとはいえ生徒が歩いている。

「おっすキリオ」

「ユウおはよー」

ちらほらだが見慣れた顔もいた。誰も俺達と一緒に登校していることに驚いた様子はない。公認の仲良しグループ扱いつてことなのか？学校の裏門に着いた。

へえ、ここに繋がるのか。まあ遠回りだし、まず使うことはないな。ユウとはクラスが別なので、正面玄関前で立ち止まる。

「じゃ…」

「おっはよー！」

勢いよくカオルが現れた。

「あ、カオル、お、おはよ」

「よっ」

「あれ、キリオとユウが一緒？ 今日の朝練は…もっつ」

「わっ、じゃ、じゃあねキリオ。今日はありがと」

ユウはカオルの口を押さえ付けながら校舎に入っていた。

「なんだありゃ？ それに、ありがとって？」

後ろを振り返ると、グラウンドでは陸上部が朝練をしていた。
ああ…、ユウは朝練がないって言ってたけど、あれは嘘か。
今日に限って裏門から…、なるほど、こっちのルートからだどグラ
ウンドは見えない。

俺だって少し考えれば判る。理由は明白だ。

ユウは俺と仲直りしたかったんだ。

ユウは真面目だから自分から誘うとか苦手なんだな。それで精一杯
の口実が朝練がないってか。

あはは、そんなのすぐにバレるだろ。まったく、嘘までカワイイの
な。

ユウは多分、俺に好意を持ってくれている。

まだ彼女の中ではボンヤリした感じなのかもしれないけど、それは
俺の態度がハッキリしてないせいもあるんだろう。

ユウのことは気になってる…だけど、付き合いたいってワケじゃな
い。記憶を失っていないければ…、俺がもっとユウのことを見ていれ
ば、二人は付き合ってたんだろうか？

そういえばおかしなもんだ。ユウのことといい、河原の子といい、
俺、記憶喪失だぜ？　なのに“好き”とか言っつて、なんか笑えるよ
な。

「!？ あ…」

ウワサをすれば、例の河原にいた子じゃないか！

彼女、同じ学校だったのか!？

彼女のいる下駄箱の場所は三年生の…、年上だったのか。どうりで
大人っぽいと思ったんだ。

すぐに名前も判った。

“アイ”。

彼女の友達が彼女をそう呼んでいた。ピッタリのいい名前だ。

彼女が同じ学校だと判ったものの、俺との接点がないことには変わらない。

でも何か話したい…、落ち着かず、休み時間の度に校内をうろろろしていた。

キツカケがほしい…。

そう思った矢先…、前からアイが歩いてきていた。

「…！」

咄嗟めいごに体が隠れようとする。

何やってんだ俺！ 今“キツカケがほしい”って思ったばかりだろ！ 逃げるな！

それに…、一度記憶をなくしてるんだ、これ以上失うものなんてないだろ！

俺は近付いてくるアイに勇気を出して声をかけた。

「あの…、すみません」

「はい？」

「よ、よく河原の高架下にいますよね？ 俺もあそこよく通るんで

…」

何言っただ俺は！？ よく通ってたなら話しかけるのか？ これじ

や不審者っぽくねえか？

アイは驚いた顔で俺を見ている。信じられない、といった表情だ。やべ、なんかまずいこと言ったかな？

「まさか君の方から声をかけてくるなんてね」

「えっ？」

アイは俺を知っている？

いやでも、それを聞くワケにもいかない、なんて切り返す？

「えっとそれは、どういう意味ですか？」

濁してしまった。

「ふーん…。ねえ、それじゃ明後日のお昼に改めてあそこの高架下で話さない？」

「はい？」

「決まり。じゃあ日曜の2時に高架下に来てね」

「は、はいっ！」

アイは足早に行ってしまったが、ひいき目にみても嬉しそうに見えた。

第二話 3

日曜にアイと会う約束…、それもアイの方から誘ってくれた。

少しだけ浮かれていた俺の元に、また非通知の電話がかかってきた。なんて間が悪いんだ。奴がどこからか俺を見ているとしたら…、まさか、非通知の女は同じ学校の奴だったりしないよな？

「…もしもし」

『ハロー久しぶり。なかなか出ないから着拒されてるのかと思っちゃったー』

「何の用だ！」

『やだ怒らないでよ。この間の続きよう』

相変わらず人をバカにしたような口調だ。声も変声機を通した例の高いトーンだから、尚更イラっとくる。

「お前…、何を知ってる？」

『何って…、もしかして秘密のことかなー？』

「…」

こいつは…！

やっぱりあれは夢じゃなかったのか？ じゃあ俺が秘密を交わしたのも…！

いやまで、まだ確証があるわけじゃない。

「何のことだ？ 秘密って？」

『あはははー、無理すんなって。アンタの記憶のことだよ』

「な！ お前は…、いったい何者だ！？」

こいつは！ 秘密だけじゃなく俺の記憶のことまで知ってるのか！？

『日曜2時に駅前のパン屋“サンライズ”で待ってて、アンタの秘密を教えてあげる。あと、メロンパン10個よろしくね』

「えっ、日曜は…」

ブツッ

『ツーツーツー…』

「くそっ、切りやがった」

日曜の2時って…、アイとの約束があるってのに。

どうする？ あの感じ…、非通知の女は俺の秘密を確実に知っていると考えるべきだよな。

俺の目的はなんだった？

秘密を調べること…、だったら迷うことはないはずだ。

だけどそれは、信用できる相手を見つけて、一緒に協力しながら調

べるつもりだった。

あの非通知の女は少しも信用できない。当日だって正直に姿を現す保証はない。

いつも陰から人を監視して、あの人をからかうような口調…、もしかすると俺を見て遊んでいるだけかもしれない。

だけど、遊んでいるにせよ、俺に秘密を教えるにしろ、奴に何の得があるんだ？

そういや“メロンパン10個”って言ったな、それが奴の目的か？

いや、そんな訳ないだろ。

「判んねえ…」

ブブブブ…

また着信がきた。

「やろっ、懲りずにまた！」

ディスプレイの文字は“ユウ”と表示されていた。

ユウから！？ 今朝一緒に登校したばかりなのに、ワザワザ電話つてなんだ？

「もしもし？」

『あ、ごめんねキリオ、今だいじよぶかな？』

「あ、ああ、へーキだけど」

心なしか、ユウの声が緊張してるように聞こえる。

『今度の日曜…とかさ、時間、あったりする？』

「え、日曜!？」

しまった、驚いてつい声が高くなった。いくらなんでも立て続け過ぎだろ!？

『あ、ごめん、なんか用事入ってた？』

「日曜は、ちょっと用が…」

『そっか、ごめん。別に大した用じゃなかったから気にしないで』

「フリ…」

『うっん、それじゃね』

「おっ」

電話を切つてすぐに、後ろめたい感情が俺を襲った。

ユウの誘いを断つたのは…、秘密を知りたいって気持ちからか、それともアイに会いたって気持ちからか。

いずれにせよ、自分の中でハッキリ答えが出せないと言っておきながら、今の対応はユウが“最優先”ではないことを示していた。

「くそっ…、なんでこうも全部重なるんだ!」

それも違うか…、タイミングが重なってなきゃ全てに顔を出してい

いのかよって話だよな。

「くそっ、何やってんだ。もっとちゃんと考えるよ、俺」

昔の俺と今の俺、どっちか気持ちをハッキリさせる必要があるんじゃないか

第二話 4

日曜日、悩んだ末、俺が向かったのは高架下だった。

アイにしても非通知の女にしても、俺はどちらの連絡先も知らない。ということとは、どちらかの約束はすっぱかすことになる。

だから俺はアイを選んだ。

別に秘密のことがどうでもよくなった訳じゃない。

だけど、それよりも気になったのは、アイが俺を知っていたってことだ。

二人は知り合いだったのか？ それともアイが一方的に俺を知っていただけなのか？

2時ちようどに高架下へ着くと、既にアイが待っていた。

あの時と同じ…、河原を背にアイと猫がじゃれている。

やっぱり目が離せない。前に見かけた時は立ち尽くすだけだったけど、今は違う。

アイに引き込まれるようにして足が進む。

やべ、緊張してきた…。

アイのすぐ近くまでくると、じゃれていた猫が俺に気付いて逃げたしまった。

「あ、ゴメン」

続いてアイも俺に気付く。

「や。いいよ、あの子は君の変わりだから」

「？」

日曜の真っ昼間とはいえ、人気の少ない河原に二人…。なのにアイは全くといっていいほど警戒がない。つまり、お互い顔見知りってことだ。

「来てくれてありがとう。お礼にいいこと教えてあげる」

これまでの寂し気な感じと違い、明るい口調で話し出したアイはどこか嬉しそうだ。

「いいこと？」

「私とアナタ、実は付き合ってるんだよ。知ってた？」

ええっ！ それって昔話？ それとも進行系なのか？

「付き合ってた…？る？」

アイの顔が少し赤くなったのが判った。

「る…」

うはっ！ ちょっとどうなってんだよ俺！ まさかの展開じゃないか！

どつりで妙にアイのことが気になった訳だ。

待てよ、喜ぶのはまだ早い。

最近の俺ときたら…、やたらユウと仲良くしてなかったか？ でも、

アイはそのことを詰^なったりしてこない。なんでだ？
この間もアイは俺を無視して素通りしようとしていた…、それって
つまり、もしかして？

「えっと、あの…、まさか俺の記憶のこと…」

「…知ってる」

げ！

でも…、そりゃそうか。

付き合ってたんなら、不自然だって気付いて当然だよな。

「だって、付き合った次の日からここには来ないし、すれ違っても
無視よ。普通あり得ないでしょ？」

「うわ、ご、ゴメンなさい！」

うひゃー、なんか色々つじつまが合ってきた。

「いいのよ、また一から始めれば。ただ、ウチってすごく厳しくて
ね、付き合つとかNGで、しかも歳下で、さらに記憶喪失なんて、
ふふ」

「あははは…かんべんして…」

「だから、このことは絶対に秘密よ。約束だからね」

「ああ、わかった」

あれ、このシーンどこかで…？

!!

俺の顔色が変わったせいか、アイが心配そうに覗き込んできた。

「どうしたの？」

「いや、俺が唯一覚えてたこと…この場所で同じ台詞を…」

「覚えてるの!？」

“同じシーン”、“同じ台詞”、その後俺は記憶をなくした…。
ちよっと待て…! なんだこの漠然とした不安感は!?

まさか…。非通知の女が頭をよぎる。考えが悪い方に向かっている…。

「アイ…」

「何？」

「俺に電話したことある？」

「ないけど。私、携帯持たされてないから…。どうして？」

「俺、記憶をなくす前に誰かと電話で話してるんだ」

「…! それ私って？」

「いやゴメン! 判らないんだ、覚えてなくて。付き合ったその日

なら電話くらいするんじゃないかと…」

「確かにね。でもウチはアレだから…、電話すらできないし、ウチの番号は伝えてないからキリオがウチに電話することもあり得ないわ」

「そっか、そうだよな。良かった…」

そうだよ…アイが非通知の女のワケがない。今だってほら、記憶はちゃんと残ってる。

「良くない!」

「え!？」

「早く言いなさいよ、そーいうことは!」

「え?」

「記憶がなくなる直前に電話で話してたんでしょ!？ 記憶喪失と関係あるかもしれないじゃない! 誰と話してたの!？」

えらい剣幕だ。そりゃそっか、誰かのせいどころなつたのだとしたら、アイだって被害者だ。

「いや、だから判らないんだってば! 電話は非通知だったし、けどそいつは俺の記憶のことを知っていた…」

「ねえ、それって本当に記憶喪失なの?」

「え、どういづこと…?」

アイは神妙な面持ちで思いがけないことを言った。

「もしも…、もしもよ、その電話の相手がキリオの記憶を消したとしたら…」

「…え?」

そんな可能性、考えもしなかった。単純に記憶喪失だとしか…。別に知らない病気じゃないし、誰だってなる可能性がある。たまたまそれが自分だっただけで仕方がないと思っていた。

「そんなバカなこと…」

あり得ない。

「わかってる。でも…、記憶がなくなる前に電話があつて、記憶をなくした後もそうして連絡がある。さっき言ったことは考え過ぎかもしれないけど、怪しい人物ってことは確かよ」

アイは腕組みをし、右手をあごの下に持っていった。きつと、あらゆる可能性を考えてくれているのだらう。それって俺の為…?

「やっぱり良かった」

「だから何が…」

「記憶をなくす前も今も、アイを好きになって良かった」

すっと出た言葉に俺自身驚いた。

アイもびっくりした顔でしばらく固まっていたが、コクリと小さく頷くと俺に寄りかかってきた。

「淋しかったんだからね」

「ゴメン」

「キリオは謝ってばかり」

「はは、ホントだ」

「にゃー」

さっきの猫が戻ってきた。

「キリオ！」

は？

「今なんて？」

アイは“しまった”といった感じで顔を赤くした。

「だから淋しかったって言ったでしょ！」

俺の名前を猫に…？

ずっと待っていてくれたんだ…。

“秘密”も“過去の記憶”もまだ判らない、
なことを気付かせてくれた。ただどそれ以外の大切

今日ここに来て…アイと話せて良かった。

第二話 5

「そろそろ帰らないと」

アイはそう言ったが、まだ日も暮れていない。

「え、もう?」

「門限」

さすがはお嬢様だ。

「ホントにあるんだそういつの」

「まあね。さっきは話切られちゃったけど…」

「ん?」

「今後、非通知の電話は一切出ないこと!! ーいーい?」

「…わかった」

すっかりアイに念押しされ、お互い河原をあとにした。

家に着くと待っていたかのように妹のサヨがリビングから出てきた。

「おかえりお兄ちゃん。さっき森戸さんって女の人から電話があったよ」

「森戸…」

ユウから？

「ああ、そっかサンキュ」

なんで家に？ 携帯にかかりやいいのに…。

携帯を見るとユウからの着信が二件、ついでにタケルからも一件入っていた。

しまった、それで家にもかけてきたのか。昨日はユウの誘いを断ちまったからな…。一応かけ直した方がいいよな？

自分の部屋に行き電気をつけた。

ブブブブ…

着信だ。ユウ、それともタケル？

「もしもし…」

電話に出る瞬間、一瞬だけディスプレイに“非通知”の文字が見えた。

しまった！！

『今回は早かったね』

この高いトーンは、やっぱりあの女の声だ。早く電話を切らないと。

『ユウは…』

！？

なんでユウの名前が出てくるんだ？　すぐに電話を切らないと。だ
けど…、こいつは俺が知っている誰かなのか！？

『ユウは今日、ずっと駅前でアンタを待ってたんだよ』

駅前？　どうして？

俺との約束じゃない。こいつまさか、俺だけじゃなくユウにまでち
よっかい出してんのか！？

「お前は誰だ！」

『アタシ？　あっはっはっは！』

女は受話器の向こう側で高らかに笑っている。

『アンタどうせ忘れちゃうのに聞いてどうすんのさ！』

この声のイントネーション…

『耳を澄まして考えても判らないよ！　特別な電話使ってたから。
それと…アタシの声は電話越しだと妙な力があってね』

もう少し、この感じ…思い出せそうなのに。

『…記憶を消すことができるの』

!?

「なっ!」

な…に?

ふざけてるのか!?

『もっと別の力が良かったのに、記憶を消すだけなんて。しかも都合よく操作することもできない』

とにかく話を延ばさない。

「何言ってるんだ…そうだ、秘密! 秘密って何だったんだ? どうせ記憶が消されるなら最後に教えてくれよ!」

『ダーメ』

「なんで!?!」

『アンタ…、今メモとってるでしょ? サヨナラ』

マズい! 電話を切らないと…

『リセット』

プー・プー・プー

じ
じ
く

第三話 また記憶がないっ！

「アイお嬢様。お申し付け通り、彼の交友関係とその友人を調査いたしました」

「ありがとうございます」

橘はうちの中でも特に優秀な執事だ。彼が調査報告をする時は、決まって有用な情報を持ち帰ってきている。

「それで、何か分かったことは？」

「“柳キリオ”、彼の症状は記憶喪失とは違ったようです」

「やっぱり…。それは記憶が操作されたということ？」

「はい、おそらく。ただ、記憶を操った方法や手段は解りませんが、該当者は一人に絞られました」

「そう…」

「ごめんねキリオ…。こんな探偵みたいな真似ごととして。」

貴方の友人を疑いたくはなかったのだけれど、あまりに貴方の様子が急変してしまったから…。

それに…。もう二度とあんな想いはしたくない。

翌朝、真相を伝えようと、キリオが家から出てくるのを近くで待つ

ことにした。

どうしてキリオの記憶は消えてしまったのだろうか？

ずっと抱いていた疑問…、それは昨日、本人に話しを聞いて判った。キリオが何らかの“秘密”を知っていること。その“秘密”を記憶ごと消し去った人物がいること。

橘からの報告で、その人物が誰かも分かった。それがキリオの身近な人物であることも…。

緊急の要件なのに電話できない家の事情が煩わしい。いずれにしても、急いでキリオに伝えるべきだと足を運んだ。

「いつてきまーす」

出てきたのはキリオではなく女の子だった。妹さんかな？

そういえばキリオって朝弱いんだった。学校で待つべきだったかな。そんな心配を他所に、しばらくするとすぐにキリオは出てきた。なぜか妙にキョロキョロしている。

「ぶっ。なんかキリオってば挙動不審。意外な一面見ちゃった」

それはそうと、早くキリオに伝えないと。

「おはよー」

声をかけつつ駆け寄ると、キリオもこちらを振り返った。

けれど少し不自然な間が空いて、お互いの目が合った時、キリオは

やっと呼ばれたのが自分だと気付いた。

「…えつと君は？」

なんかキリオの様子が変だ、私のこと判ってない…？

「キリ…」

待って…、まさか！？

「あつ、いえ、人違いでした。ゴメンナサイ…」

何を謝ってるんだろう私。でも、この感じは前にも一度経験したことがある…。なんで？ どうして？ やつとまた距離が縮まったと思っただのに…。

キリオはゆっくりと私から遠ざかってゆく。
離れたその場所から声がする。

「おっす！ キリオ！」

キリオの親友の大和タケルだ。

「お、おっ」

「おっはよっ！ 二人とも」

あの女…！

「おっす！」

「お、おう」

「な〜に、キリオ何か変だぞー？」

「だろー」

こつちを見て女が笑っている。

やられた…！

さらに女はキリオに何か話している。何を言っているの？

少しするとキリオだけこつちに戻ってきた。私と目が合うと、キリオは軽く会釈して通り過ぎようとする。

「ちよつと、学校はそつちじゃないですよ」

「知ってます。友達の家に行くので」

！？

友達って、森戸ユウのこと？

でも、あの子は朝練に行ってるはず…、まさか今日はまだ家に？

あの女さつき笑っていた…、いったい何考えてるの…？

頭の中では色々な憶測がぐるぐるしながらも、遠ざかるキリオを黙って見ているしかなかった。

今回も、その前も、付き合った次の日にキリオの記憶が消された…。偶然じゃなく目的があるのだとしたら…、狙われてるのはキリオ？
それとも私？

第三話 2

またキリオの記憶が消された

あれから私はキリオの行動を追っている。

以前は何が起きたか解らず、ただシヨツクのあまり塞ぎ込んでしまっただけで、今は違う。

私だって、いつまでもじっとしたままじゃない！

あの女は消した記憶の確認か、あるいは別の目的があるのか、どちらにしてもキリオか私を監視する為に近付いてくるはずだ。

私がキリオを、橘が私を尾行する。何も知らずにあの女が尾行してくれば、二重尾行になる。まさか自分が尾行されるとは思いもしないはず。

遠目に追い続けるキリオの背中…、今日は一人。

この道は、キリオが家に帰るにしてみればだいたい遠回りみたいだけど…。

…！

こっちは…、あの高架下の方だね。

キリオとの思い出が蘇る。あそこで二人は付き合い合う約束をした…。

記憶をなくしても、どこか頭の片隅で覚えていてくれるのかもしれない。

だけど、そんな私の淡い期待はすぐにひっくり返った。

河原には…森戸ユウの姿があった。

どうしてあの子が？
キリオは彼女に近付いてゆく。

な…に…コレ？

私と森戸ユウが入れ代わったようなシチュエーション…。
何が起きているの？

まさかキリオ…、こんなことで付き合ったりしないよね？
駄目だ…見ているのが辛い。

弱気な自分が現れ、その場を去ろうと振り向いた先に、あの女が立っていた。

「貴女…！」

思わず声をあげてしまう。

しかし、女はとぼけた顔をしている。

「え、アタシ？ どこかでお会いしましたか？」

「このっ！」

「あっ、すみません。うちの学校の先輩…ですよね？」

「白々しい！ ふざけないで！」

カツとなってさらに声が大きくなる。

一瞬、間を空けて女はやれやれといった感じで続けた。

「あまり大声を出すと、あの二人の邪魔になりますよ」

目でキリオと森戸ユウを見る。
いつの間にか二人はなんとなくいい雰囲気になっている。

「なんかお似合いですよねーあの二人。あはは、髪の色も一緒だし」
何が言いたいのよ？

「それじゃ先輩、失礼しまーす」

女はそう言って一礼すると、河原に降りていった。

「ユウー、キリオー」

ちよつと…!?!?

キリオか私の後を尾けさせようと考えていたのに、どちらにも直接絡んでくるなんて…!

まさか牽制してるつもり？ こっちの思惑が読まれてるなんてこと…、そんなはずはない!

だとしたら、あの女の目的は何？ キリオと森戸ユウをくつつけること？

いや、そんな理由でキリオの記憶を消すなんて考えられない！ 必ず裏があるはず!

こうなったら徹底的にあの女を調べるしかない。

第三話 3

調査の相手は“一之瀬カオル”、高校二年生。
彼女はキリオの隣の家に住んでいる。

性格は明るく社交的で交友関係も広い為、常に誰かと一緒にいることが多い。

学校には毎朝決まって大和タケルと一緒に登校している。

しかし、二人は付き合っていないらしい。どうやら大和タケルの方が一方的に好意を持っているようだ。

学校に着いた後は、親友でクラスメートの森戸ユウとほとんど一緒に行動している。

放課後だけは別々で、森戸ユウが陸上部に出ている間、一之瀬カオルは生徒会室で時間を潰し、二人は待ち合わせて一緒に帰っているようだ。

ここまで調べてみて気になったことがある。

彼女は常に誰かと一緒にいて、一人でいる時間が極端に少ない、ということだ。

そんな中で、彼女はキリオに何度も電話をかけていたことになる。

結局…、判らないことだらけか。

今判っているのは、キリオの記憶を操作したのは一之瀬カオル、彼女だろうということだけ。確証はない。

消去法による見解なので、あくまで憶測レベルだが、行動や言動、動機のいずれにおいても彼女は全てに該当する。

なにより私にとっては彼女と直接会って話したあの印象が色濃く残っている。

だから今は少しでも証拠がほしい。今日は日曜日…、彼女が行動を起こすとすれば休日以外に考えられない。まず間違いなく外に出かけるはず。

「…！ 出てきた…」

同時に彼女の尾行を始めた。

…それにしても、いったいどこに向かっているのかしら？

森戸ユウの家でもない、学校でも駅でもない。この先は河原沿いの道だけど、いつもの高架下の方でもない。

でも、今は予想外に動いてくれた方がいい。こっちも行き詰ってたんだ、何か新しい情報が得られるかもしれない。

それにしても、“記憶操作”なんてこと…現実的にできるものかしら？

方法どころか何が引き金になるかすら判っていないし、それって、仕掛けられたら防ぎようがないってことよね…。しかも証拠は残っていない…。

もしそうだとしたら、私のやろうとしていることに意味はあるんだろうか。

ううん、意味なんて必要ない。

私とキリオの仲を二度も引き裂いたんだ…、このまま見過ごすことなんてできない！

一之瀬カオルはいつもの高架下ではなく、ひとつ隣の小さい橋を渡り始めた。

こちらから見ると、いつもの高架下は随分遠くに見える。向こうの

方が川の下流なので、ずっと川幅が広いからその分橋が長いのだと改めて気付いた。

あの場所は…私とキリオの思い出の場所。でも、キリオのその記憶はもう上書きされてしまった。相手を森戸ユウに変えて…。その一件以来、キリオと森戸ユウは明らかにお互い意識し合っていて、進展していた。

一之瀬カオルが歩きながら携帯を取り出した。着信かな？ 違った、彼女からかけるみたいだ。

「あ、もしもしーユウー。×××××…」

この距離だと、かすかに聞こえたのは始めの名前のところだけ。森戸ユウに電話をかけているみたいだけど、なんでわざわざこんなところから？

少しすると彼女は急に足を止めた。

ええっ、ちょっとちょっと！ なんで止まったの！？ まさか尾行が気付かれた？

特に警戒してた様子はなかったはず、だけどマズイ…、橋の上は見通しが良すぎて隠れる場所がない。ここそのまま歩いてやり過ぎるか…、立ち止まるのは不自然だし、引き返すのはもつと怪しまれそうだ。

彼女は橋の手すりに肘をつき、例の高架下の方を見下ろすと別のところに電話をかけ始めた。

『あっはは。だーれだ？』

!!?

なに今の声!? まるで別人じゃない!

さつきより彼女と私の距離は近くなっている。声だってより鮮明に聞こえるはずなのに…聞き間違えるなんてことは有り得ない。

『ねえ、これから駅前にこれないかな?』

この声って…、よくテレビなんかで見る匿名の音声みたいだ。まさか、これが記憶操作に関係してるんじゃない??

待って、今は会話の内容に集中して聞き逃さないようにしないと。幸い彼女は電話に集中している。今ならこのまま後ろを素通りしてもやり過ごせる。

でも、これは逆にチャンスかも。何でもいいから、証拠の決め手となる会話が聞ければ…、それに電話の相手も気になる。相手はキリオなんじゃないの?

『いいの? 例の秘密、知りたくないの? 今から駅前のパン屋“サンライズ”に来れば教えてあげる』

この女、今“秘密”って…!!

間違いない! 電話で話している相手はキリオだ! この変な声でキリオを操作してたんだ!

私が今日、この場所を、このタイミングで通つたのはきっと…、私自身の手で、この女を裁けということなんだ!

「一之瀬力オルっ!!」

私は彼女の方に向き直り、力強く声を上げた。全てをここで終わら

せる為に。

第三話 4

急に呼び止められ、一之瀬カオルは驚いた顔でこつちを振り向いた。まさかこんなところで誰かに声をかけられるとは思ってもみなかったらしい。

どんな人間でも咄嗟とつぱの出来事には冷静な対応ができない。

それは彼女も同じ、“どうやってこの場を乗り切るか”と、今は頭をフル回転させているはず。

でもそんな猶予は与えない。私は目配せで橋に合図を送る。

近付いて来るスーツ姿の男が私の関係者だと解るよう、わざと手をかざし適当な位置で橋を止めた。勿論、逃げることはできないと暗に示して、ここで私と話しをさせるのが狙いだ。

彼女は私と橋を見てすぐに自分の状況を理解したのか、自分から口を開いた。

「あら先輩。またこんなところで、奇遇ですねえ」

「今更、言葉を選んでしゃべらなくてもいいんじゃないかしら」

こう言えば、さっきまでの通話が聞かれてたって判るわよね。

でも用心深い彼女のことだから、いくらでも言い逃れしてくるでしょうけれど。

「ふーん…、そちらはお連れさん？　もしかして、アタシのこと嗅ぎまわってたとか？」

へえ、正面から向かってきた。まともになり合ってくれるのなら好都合だわ。

「さつきは誰とお話ししてたの？」

「それは…、先輩に言わなきゃいけないことですか？」

やっぱり切り崩しが足りない…、でも決定的な情報は揃ってないし、だからといってこの機を逃すわけにはいかない。

「電話の相手は柳キリオ。あなたの幼なじみよね？　なのにどうして他人を装って電話しているのかしら？」

「…ふふ」

この子、笑った？

「先輩、カマ掛けるなら、もっと上手くやらないと駄目ですよ。アタシが一言、キリオじゃないって言ったらどうするんですか？」

！？

「…そう言われたら終わりね。でも貴女は私と話してくれた。自分がやったことを認めてくれるんじゃないかと思ったのだけれど」

「認めるって…、アタシなにかしましたっけ？」

ちょっと強引だけど…。

「キリオの記憶を消したのが貴女だってことは、とっくに判ったのよ。でも記憶を操作した方法がどうしても解らなかった…。まさかあんな方法だったとはね」

私の言いたいことに気付き、一之瀬力オルは何かを口に吸い込んだ。
薬…!?!?
まるでスパイ映画のワンシーンかと錯覚した。まさかの結末…って
ことはないわよね!?

シユー

「え?」

『ほ、ら、面白いでしょ? 声が変わるの。ね、さっきのイタズラ
電話もこれで』

イタズラ電話!?

『えっと、記憶…操作でしたっけ? それって何のことですか、先
輩?』

やられた!

彼女は小さなボンベを持っていた。中身はヘリウムガス?

なんでそんな物…、まさかこれも想定内なの? しかも、声を変え
て電話してましたって…、あのさっきの電話を“イタズラ”にして
開き直るつもり?

でも、確かに記憶操作についての証拠はない。まさかこんな形で白
を切るなんて…、そうはさせない!

「橘!」

こうなったら調べた洗いざらいの情報を突き付けて…

『あ、あー、ちよつと待って…』

彼女は掌を私に向け、発声を始めた。

「あー、ん、んん！ よし、だいぶ声が戻ったかしら」

ヘリウムガスを使い切ると、彼女は背伸びを始めた。

「んー、先輩もういいよ。どうせ誰にも証明できっこないもの」

彼女は私に背を向けて、再び橋の手すりに肘をついた。あの高架下を眺めているようだ。

「キリオの記憶を消したのはアタシ」

「な！」

どうしたっていつの急に？ 今ので彼女が折れる必要はなかったはず。

「きつと先輩が一番の被害者ですよね。今までのことは素直に謝まります。ごめんなさい。何ならあの二人にもこのこと全て話してもいいです」

「何？ 何考えてるの貴女…？」

「くっくく…、ああ、ごめんなさい。アタシ今、謝ってるところでしたっけ？」

一之瀬カオルの態度が急に変わった？ どういうこと？ 犯行を認めたのに、まだ何かあるっていうの！？

まさか！ 私の記憶も消そうっていうんじゃない？
思わず足が後退る。

「あーおっかし、別にアンタの記憶は消さないよ。追いつめられてるのはアタシじゃなくて、先輩の方だし」

「どういうこと？」

「先輩がアタシにやつきになってる間、あの二人、キリオとユウはいい感じになっちゃってたでしょ？ あれ、アタシの仕業」

「このっ！」

「先輩、アタシに構い過ぎてあそこの高架下にも行ってないでしょ？ キリオは何度か来てたみたいけど」

「！」

「あっはっは、でも大丈夫。“キリオ”も“猫のキリオ”も、ユウが面倒みてくれるから。あっははは」

「なんでそれを！？」

「アンタって本当にお嬢様なのね」

一之瀬カオルが意味ありげな台詞とともに橋の方を見た。

「どづいづこと…まさか？」

私も橘を見ると、橘は視線をずらし顔を伏せた。
思わず唇をかむ。

「仕えの人はアンタを心配してるんじゃない。いつでも家のことを心配してるんだよ！ アンタの相手はキリオじゃ駄目ってさ！」

「橘！ どづいづこと！」

「申し訳ございません。隠していた訳ではないのですが、旦那様にどこからか連絡が入っております…」

どづりで…、急に門限が厳しくなったり、電話をかけることさえ制限されたり…。

一之瀬カオルを睨みつける。

「くつくくく…」

「何がおかしいの!？」

彼女は笑いを抑えきれないといった様子で続けた。

「いや、おかしいでしょ。アンタが必死に色々嗅ぎまわってくれたおかげで、確か“非通知の女”だったけ？ キリオはアンタを疑ってるんだよ。あはははは傑作！」

「そんな…！」

目の前が一瞬真っ暗になると、全身の力が抜けたようにしゃがみ込

んでいた。

「だから今さら本当のこと話したって、今の状況が逆転することは絶対ないね！ ユウは一途にキリオを想い続けてたけどアンタはどうだった？ ははっ！ もう元には戻らないんだよ。そう…、アタシの力を除いてはね…」

！？

駄目だと判りつつも、自分の肩がビクッと揺れたのが情けなかった。思わず彼女の言葉に反応してしまった。

彼女の言う通り、途中からキリオとの関係が絶望的になって、私は“一之瀬力オル”の調査に没頭し、そのことを見ないようにしていたんだ。

「いいの？ このままだとあの二人、付き合っちゃおうよ？」

許せない！ この女！

「キリオとユウは今ちょっと喧嘩中でね、お互い仲直りするキツカケがほしいのよ。そこで、私がキリオを連れて高架下に行けば、晴れて二人は…」

許せない…、でもそれは私自身も…。

「さっきの電話で、謎の女を演じてキリオに発破をかけておいたの。人っておかしいでしょ？ 追いつめられると意思が強くなるの。ま、どっちに転ぶも私次第なんだけど」

一之瀬力オルの勝ち誇った顔が私を責め立てる。

悔しい…。

！？ 責める…？ なにを？ 何だろ…この違和感？
とても正確な判断ができそうにない。私はどうすれば…？

彼女は来た道を戻ろうとしている。

このタイミングを逃してしまったら、本当にキリオとは…。

彼女は最後にもう一度だけ念押しした。

「それじゃあ先輩、アタシもう行っちゃいますけど、本当にいいんですか？」

いいわけないじゃない…。

でも、声にできない。

#つづく

第四話 真実がわからないっ！

「ほら、ユウはあそこだよ！」

カオルに促され高架下に目をやると、そこにはうちの学校の制服を着た女子がいた。

茶色いショートヘアがなびいたかと思うと、彼女がこっちを向いた。

ユウだ。

腕には黒い猫を抱えている。

一瞬誰かと見間違えたような…、いや、気のせいか…。

それに…このシチュエーション、前にもどこかで…。

河原、高架下、少女、猫…。

「ほらキリオ、ユウを待たせるなって」

カオルが俺の背中を押す。

「お、おうっ」

押された余韻のまま、河原まで下る。

「きゃっ」

さっきの猫が俺に驚いたのか、ユウの腕から逃げ出した。

「あ、ごめん」

ユウは首を振って答える。

「ううん、いいの、本物が来たから隠れちゃったのかな」

本物…？

「あの子、“キリオ”って名前なの、だから」

「なーる…って、俺の名前つけたの！？」

「やつ、私じゃないよ！」

ユウが慌てて手を振る。

確かに、ユウにしては大胆な気がするもんな。

「まだ付き合ってもいない人の名前つけるなんて…、ただの偶然だろうけど、たまたま“キリオ”って呼ばれてるの聞いて、それから気になっちゃって…」

「そーなんだ」

ん？

「今の“まだ”って…」

「あ、や、それはあの…」

ユウは否定も肯定もできず、それが却^{かえ}って言わんとしていることを強調する。

「これから…じゃなくって！ あああ、私なに言ってるんだろ？」

「ユウ」

「えっ、は、はいっ」

「俺と付き合ってくれない？」

自分でもビックリするほど言葉がスツと出た。でも言われたユウの方がビックリしたみたいで、固まってしまった。

少しすると俺の顔をじっと覗き込んできた…っつーか、目！ だから目え怖いつて！

ただでさえ目がでかいのに、さらに見開いてるし！

「うんっ！…！」

え？ 今“うん”って…

そう言った瞬間、ユウは首を縦に振ってそのまま俯むついた。

えっと…

また急にユウが顔をあげたと思ったら…

「うん！ うん！ うん！」

おっ、なんだなんだ？

返事はOKってことみたいだけど、凄いテンパってるなあ。

「あ、や…判った。1回でいいから」

「うん。うれし…」

素直だなあユウは。

「俺も」

「そこでちゅーっと…」

「え！？ おわっ！ カオル！」

「カ、カオル？ なんで？」

そついやコイツがいたの忘れてた。
ユウもビツクリしてる。

「おまつ…ずっと見てたのかよ！ そこはハズすだろフツー！」

「ごめんごめん、いい雰囲気だったのにお邪魔しちゃった」

両手を合わせて謝ってるが、舌が微妙に出ている。なんだその茶目
つ気は、確信犯だろ！

だけど…、態度とは裏腹にカオルの顔は寂しそうに見える。なんか
目も微かに潤んでないか…？

「カオル…、お前…」

カオルの頬を涙がつつた。

「あれ…、おかしいな、あれ？」

「カオル…」

ユウも心配そうに声をかける。

「あはは、うれし涙」

「え？」

「ユウは私の親友だから…すごくうれしい。これで安心できる」

「カオル…」

「あと、ちょっと淋しいのもあるかも。ユウを取られちゃって…、
こういうのも嫉妬って言うのかな」

「べ、別にとっちゃいねーだろ」

「そだね。でも、おめでと二人ともっ！」

「わっ」

「きゃ」

カオルはそう言って、俺とユウをくっつけるように押し当ててその場から離れた。

「このやるっ」

ユウは顔を真っ赤にしている。

カオルは道路側に駆け上がったところで振り返った。

「じゃあねユウ、また明日学校で！ お昼はアタシとだかんねー！
キリオもじゃあね！」

「俺はオマケか！」

カオルは手を振りながら帰っていった。

「つたく、あのおせつかいめ！」

「でも…カオルには本当に感謝してる。色々と私のこと励ましてくれたり、キリオとのことも仲直りのキツカケを作ってくれたし」

「そうだな…。いい奴だよな」

「うん！」

ユウの満面の笑みにクラつとくる。
「つか、これだけ可愛かったら誰だってイチコロだろ。うわ、イチコロ”ってオッサンか俺は。
でも本当、カオルには感謝だな。」

「ねえキリオ」

「ん？」

「明日…一緒に学校行かない？」

ユウが大きな目で覗き込んでくる。
「駄目だその目は、なんでも“うん”って言っちまいそうだ。」

「せっかく付き合うことになったんだし、ちょっとだけ浸りたいな
って…。ほらっ、お昼はカオルと一緒にだし、だから朝」

「ユウ、朝練は…」

「明日だけは朝練サボりっ」

あの真面目なユウがサボりって、相当うれしいんだな。

「だからキリオも」

「ん、俺？ 部活入ってないぜ」

「ちがーう、キリオは遅刻ばかりだから。明日だけは遅刻サボっ
てよね」

「おうっっ」

やっべ、いちいち可愛いなユウめ！

この雰囲気だったら…その…、そっとユウに伸ばした手が空を切っ
た。

あれ？

いつの間にかユウは俺の隣から移動していた。

「じゃ、今日は帰るね！ 明日の朝キリオの家に迎えに行くからね

」！

「え？ ユウ、帰るって、じゃあ送ってくよ」

「ごめん、今すっごく走りたいの！ キリオも走る？」

え？ 走る？ いや、ついてけねーだろ。

「ああっ、やめとく」

「ははは、だよな。じゃあねー！」

「おう、こけんなよ」

きつと、うれしくて何かせずにはいられないんだろうな。
それにしても健康的な…、邪な俺とはエライ違いだ。

一緒に登校か…、思い返すと今頃うれしさが込み上げてきた。
なんだよ、青春してんな、俺！

第四話 2

「さーてと、俺も帰ろっかな」

河原から道路側に続く坂をゆっくり上る。

「柳君」

急に呼び止められ顔をあげると、そこにはどこか見覚えのある人が立っていた。長い黒髪が印象的な…確か一つ学年が上の“倉木アイ”…さん。

以前、勘違いで呼び止められたことがあって、その時も綺麗な人だなーとは思っただけど、そんな人が俺に何の用だろう？

「ねえ、さっきの子と君は付き合ってるの？」

「え？」

おいおいこの質問、もしかして俺って今モテ期か！？

「いや、付き合ってるかと聞かれると…」

待てよ…“さっきの子”って言ったか？

河原から道路まで上がった時はもう俺一人だったはず…ということ、その前のユウと一緒にいる時から見てたってことだよな？

何かひっかかる、この感じ…、いつの間にか監視されているような感覚…。

電話の…、そうだ！ 例の非通知の女！

いやまさか、もしそうなら、こんな堂々と出てこないだろ？
そもそもこんな綺麗な…、って違う違う！ でもこの間も俺に声を
かけてきたし…、ああダメだ俺、気にし過ぎだったの！
でも、正直悪い気はしないんだよな、今だってそうだ。
けど、万が一にも非通知の女だったら…

あああ、マズい、このままずっと黙ってたらこっちが不審がられる。
せっかく今は何もかも上手くいっているんだ、トラブルは避けない
と。

「あ、えっと、スイマセン、俺、さっきの子と付き合ってるんで…」
「どうして謝るの？」

「え、ああ本当に、何謝ってんだろ俺。す、すいません。失礼しま
す」

その場に居づらくなって俺は小走りで行った。

なんで謝ったんだ俺…、なんか悪いことしたっけ？ 倉木さんが悲
しそうな顔してたからつい…。

いや、綺麗だとか悲しそうな顔してたとかで油断したら駄目だ。ど
う考えても彼女と俺には接点がないし、モテ期なわけもない。
不自然だろ、何かあると考えるべきだ。

一応みんなにも倉木さんのことを聞いてみるか、誰かを介した共通
の知人だったらマズいしな、それこそ平謝りしないと。
でも、もし誰も知らないようなら…警戒する必要があるよな。

後日、タケルやカオル、ユウにヒロ、念の為シンには電話で確認し

たが、誰も彼女のことには知らなかった。
つまり、要注意ってことだ。今後はできるだけ彼女に関わらないよ
う気をつけないと…。

第四話 3

あれ以来、俺はユウの部活を待って一緒に帰っている。

でも今日はユウとカオルが二人で駅前に寄って帰るといっているので、久しぶりに俺は一人で帰っていた。

遠回りなのに、いつもの河原沿いの道を通る。ユウと一緒にの時はともかく、一人だったのにおかしなもんだ…。ま、習慣ってやつか。

そういやこの川ってかなりデカいよな、兩岸をまたいで大きな鉄橋が何本もかかっている。その中でも、よく行く高架下の鉄橋が一番長い。

橋自体を渡ったことはないが、歩道もある。ただ中途半端に長いせいで、ほとんど車専用状態だ。歩いて渡ってる人を見かけたことがないし、自転車でさえ稀に通る程度な…。はず…。って、誰か渡ってる！ あれ…。うちの学校の女子じゃないか？ しかも走って…

「まさかユウじゃないよな!？」

なんて冗談めかして見ていたら、ユウではなかったが、どこか見覚えが…。って、ああっ!!

“倉木アイ”だ!

あの長い黒髪といい、どこかお上品な走り方といい、間違いない。

何やってんだお嬢様が…?

橋の中央に差し掛かるうとした時、河原からスーツ姿の男が二人上がってきた。その二人も橋を渡りだす。

今日はこの橋やけに人気だな…。

…って、なに呑気なこと言ってた俺は! あれはどう見たって追われてんじゃないか! 黒スーツだぜ? ただ事じゃないだろ!

いや…でも彼女だって俺からすれば要注意人物じゃないか、できるだけ関わらないようにしようって決めたハズだ…。

アイが橋を渡りきった時、男達は橋の中央まで迫っていた。おいおい、差が縮まってるんじゃないか

「くっそ、なんだってこんなことに…」

とにかくあれこれ考えるのは後だ！

アイは橋を抜けると左手に向かった。こっち岸にある川上の橋から行けば先回りできそうだ。

アイとスーツの男達を目で追いつつ、俺は走り出した。幸い向こう岸にはオフィス街が集中している。そこに紛れ込めば追っ手を撒^まけるハズだ。

川上の橋は川幅も狭くなっているせいか、人も自転車も多かった。向こう岸を走るアイを見逃さないよう注意しながら走る。

このままお互い真っ直ぐ進んでいれば合流できる…と思った矢先にアイは細い路地に入ってしまった。

「ちよっ、待った、見失っちゃおう！」

いや…、アイなりに追っ手を撒くつもりなんだ。来た道に戻るのには考えにくい…だとすればこのまま真っ直ぐ行けば、追っ手より先にアイと合流できるはず。

橋を渡り切った後も、とにかく走り続けた。既に息はあがってるし足もあがらないし。

「くっそっ！ きっつ…」

こんなことなら普段から運動しときゃ良かった…。
さっきの路地を抜けてくるんなら、そろそろ合流してもいいはずだ
…と思つた矢先、少し先の曲がり角からアイが飛び出してきた。

「来た！」

アイもこつちに気が付いた…と思つたら、急に進路を変えた。

「バカ！ そつちに行つてどうすんだ！」

すぐにアイの後を追いかける。

「なんで貴方がここにいるのよ！？ ああもつつ、そうじゃない！
ついてこないで！」

あれだけ走つてこの元気、なんだよお嬢様、結構タフじゃないか。

「なに言つてんだ、追われてんだろ！ その先の道を左に入れ、オ
フィス街がある！」

「私に指図しないで！」

アイは「ふん」って息を荒くしてたけど、左手を見ると素直に曲が
つた。オフィス街に入った方が得策だと判断したようだ。
なんだよ素直じゃないな。

案の定、そこには予想を超える人でごつたがえしていた。会社によ
つてはちょうど退社が始まる時間帯で、放つておいてももつと人が
増えるはず。これなら自然と人ゴミに紛れ込むことができる。

ほんの5分もしないうちに追っ手を振り切って…正確には見失ったのだが、とりあえず知らないビルに身を潜め、そのまま人気のない地下の駐車場に移動した。ここなら誰か来ても足音ですぐに判る。

アイもあまり走るのは得意じゃなかったらしい。二人とも肩で息をしながら、しばらくは呼吸を整えるので精一杯だった。先に口を開いたのはアイだった。

「私とは関わらないんじゃないの？」

「そ、そんなこと言った覚えはないけど」

「でも、あからさまに避けてたでしょ？」

しまった、態度まるわかりって…、俺ダッセ。ただど今回のことは…

「そんな場合じゃなかったろ？」

「ふーん、否定しないんだ」

「あ、いや…」

「ふふ、冗談よ。でもいいのかしら？」

「何が？」

「これだって罾かもしれないわよ」

ギクッ

まさか…？　ここまで全力疾走だぜ…。

「さすがに演技には…見えなかった」

「そ」

軽くそう言うと、アイは背を向け携帯を取り出した。誰かに電話をかけている。

おいおい、本当に罠なんてことは、ない…よな？

「ああ、橘、私。状況は？　うん…、そう…、それで…」

アイは淡々と話している。

“橘”？　彼氏だろうか？

違うよな、彼氏と「状況は？」なんて会話はしないだろう。

「こっちはなんとか振り切ったけど、素性は割れてない？　そう…」

おいおい、なんだよ探偵ごっこかよ。

「それで少しマズイことになったの、ちょっと足を回してくれないかしら？　できればバイクがいいわ。あ、二人分ね。え？　そうよ、二人！　よろしく頼むわね。場所は…」

アイの電話が終わった。

マズイってなんだよ、俺のことか？
にしても…

「お嬢様も携帯なんか持つんだな」

アイは少しだけ携帯に目をやった。変な質問だったか？

「つい最近ね…。ほら、近頃ぶっそうじゃない？」

「なあ…」

「質問は終わり。すぐにここから出る迎えを寄こしたから、貴方は帰って」

「なんだよ、何がマズイんだよ？ なんの説明もなしかよ！」

「ある訳ないじゃない！ 貴方が勝手に絡んできたんでしょ！ お陰で余計な手間が増えちゃったじゃない！」

なんだろう、俺、少し緊張してる？

「アンタ何度か俺に声かけてきたろ？ あれは何だったんだ？」

アイは長い溜め息をついた。

「貴方、森戸さんと付き合ってるんでしょ？」

「な、なんだよ突然、それがどうかしたのかよ」

アイはさらに溜め息をついた。

「はい、おめでと。だから話はおしまい」

「いや、判んねえって!」

「貴方、記憶なくしてるでしょ?」

「う…、なんでそれを?」

「それともうひとつ、私のこと疑ってるでしょ?」

「いや、それは…」

「ほらね。それで、何で私が貴方に何かを教えなきゃいけないの?」

ドロン…

駐車場内にバイクのエンジン音が響いたかと思うと次第に大きくなつた。

さっき言ってた迎えてやつた。アイは特に言葉も交わさず、そのバイクの後ろに乗るとヘルメットをかぶった。

…なんか気に食わねえ。

「じゃあね、バイクはもう一台くるから、貴方はそっちに乗って」

「あ、待てよ…」

アイはこつちを振り向きもせず、突き返すように言った。

「サヨナラ」

ドルン

轟音と共にアイは去ってしまった。

心なしか強く放たれた「サヨナラ」って言葉が少し痛かった。

それから程なくして、アイの言った通りもう一台バイクが現れ、俺はそれに乗った。

全く関係ないけど、男が運転するバイクの後ろに乗るのって…なんか屈辱だ。

アイが…、誰かの運転するバイクの後ろに乗ったのも、なんか気に入らない。

さっきの「サヨナラ」だって、なんだよあれは…。

色々嫌なことばかりが頭の中で繰り返す。それを紛らわそうと、走行中は記憶や秘密のことを考えるようにした。

俺の記憶…、非通知の女…、今回の件…、少し疑いはしたけどアイは犯人じゃない気がしていた。

バイクは学校の前で止まると、俺はそこで降ろされた。

なんで学校？ 尾行とか考えると、何かと足がつかないようになって配慮なのか？

でもそれは、裏を返せばアイが危険なことに足を踏み入れているってことになる。そしてそれは、俺と無関係とは思えなかった。

俺はバイクを運転していた男に尋ねた。

「なあ、いったい誰に追われてたんだ？」

男は何も答えない。

ドルルルン

バイクのエンジンをふかしている。
反射的にバイクの前に出てハンドルを押さえつけた。

「頼む、教えてくれ！」

スモークがかったヘルメットのゴーグルからは男の鋭い目がうつすらと見える。

俺は一瞬たりとも男から目を逸らさなかった。

ドルルン　ドルルン…

男は二、三回エンジンをふかしたが、少しして諦めたかのようにふっと力を抜いた。

「…お嬢様を巻き込まないでほしい」

本当に“お嬢様”って呼ばれてんのかよ。

「手を貸すのは一度きりだ。やつらを仕切っている人物の名は…、
“中川シンヤ”」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2921w/>

記憶がないっ！

2011年10月28日08時07分発行